

氏名	もり かわ てつ お 森 川 哲 雄
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学位記番号	論 文 博 第 427 号
学位授与の日付	平 成 13 年 11 月 26 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	『蒙古源流』の研究

論文調査委員 (主 査) 教授 間野英二 教授 杉山正明 教授 庄垣内正弘

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は17世紀後半に内モンゴル、オルドスのウーシン旗の貴族、サガン・セチェンによって編纂された『蒙古源流』(Erdeni-yin tobči)に関する文献学的・歴史学的研究である。本論文は大きく3部、すなわち『蒙古源流』の諸写本に関する研究を中心とした第1部「研究篇」、5種類のテキストをローマ字転写して比較した第2部「5種テキスト篇」、日本語訳と注釈、索引等を内容とする第3部「訳注篇」から構成される。

第1部「研究篇」の第1章、「『蒙古源流』について——総論」は、『蒙古源流』の史料的価値、著者の事績、編纂年代、そのモンゴル名、テキストの公刊の歴史など『蒙古源流』の基本的問題を検討したものである。それらのうち、編纂年代については『蒙古源流』に矛盾する記述がみられるため、従来から種々の議論がある。本章ではこれらを再検討し、通説の1662年説を支持した。また『蒙古源流』のモンゴル名は写本によって異なっているが、これは書写者が書写する際に、その内容から適当な名を付けたためであると結論した。また殿版『蒙古源流』の成立過程について、中国第一歴史檔案館蔵の満文檔案を紹介し、従来漢文史料で断片的にしか知られていなかった、ハルハのチェンゲンジャブから『蒙古源流』の写本が乾隆帝に献本される過程の詳細を明らかにした。その檔案の記述から、献本された元の写本はその父ツェリンの従妹のところにあったものであること、また漢文史料ではこれを『青吉斯汗世系記載檔案』と呼んでいるが、もとの満文檔案ではCinggis han i forgon i da sekiyen be ejehe bithe (チンギス・ハン時代の根源を記した書物)とか、Cinggis han i forgon i baita be ejehe dangsa (チンギス・ハンの時代の事を記した檔子)とが色々な呼び方がされていたことなど、従来知られていない事実が多く含まれている点を紹介した。ついで殿版以降の『蒙古源流』のテキスト(漢訳、満文訳を含む)の公刊の歴史について整理し、それらのテキストの持つ意味について述べた。また多くの写本を比較して、大まかに写本間にどのような記述の違いがあるかを検討し、通称ウルガ本、アラク・スルデ本等は脱落が少ないのに対し、Erdeni-yin tobči-aや殿版系諸本にはかなりの脱落があること、他方Erdeni-yin tobči-aには他本に無い文章も多く見られることを指摘した。最後に『蒙古源流』の研究史について、特に日本における研究を詳細に紹介し、それらの研究の意義について検討した。

第2章、「『蒙古源流』の写本とその系統」は『蒙古源流』の写本を系統分類したものである。すなわち内蒙古社会科学院図書館、内蒙古自治区図書館、モンゴル国立中央図書館において実地調査した10数種類の『蒙古源流』の写本を紹介するとともに、これらと併せ、従来公刊されている『蒙古源流』のテキスト、ならびにサンクトペテルブルクの東洋学研究所蔵の写本など、30種余りのテキストについて比較し、その系統を分類した。ほとんどの写本には、何時、誰が、どこでどのようなテキストから写したのかという書誌学的記述は無いが、大半のテキストにはその記述内容から系統分類を可能にする特徴が見られる。それらの特徴の一つは明代モンゴル中興の祖といわれるダヤン・ハーンの諸子の生年に関する記述であり、二つにはモンゴル最後のハーンであるリグダン・ハーンに関する記述で、写本によって特徴的な記述が見られる。この他に、いくつかの写本には短い文章ではあるが必ず欠けているとか、大幅な記述の脱落、あるいは共通の書き加えが見られる。それらを整理した結果、大きく(1)ウルガ本系、(2)アラク・スルデ本系、(3)Erdeni-yin tobči-a系、(4)殿版系、(5)その他、に分類することが出来る。またこのように分類された各系統のテキストをさらに検討して、各系統の中にも密接な関連性を持

つものとそうではないものがあることを発見し、それに基づいて一層細かく分類した。なお近年モンゴル国、ケンテイ・アイマクからもたらされた新しい写本が公開されたが、これは上記の分類では(3)Erdeni-yin tobči-a系に属することが認められ、この分類方法が有効であることを示している。

第3章、「『蒙古源流』殿版系諸本に関する諸問題について」は、『蒙古源流』のテキストの中でも特異な殿版系諸本の持つ問題を検討した。まずモンゴル国立中央図書館蔵の『天からの命により始まったハンらの黄金の一族の白い歴史 Tngrideče Jayayabar egüdügen qad-un altan uruy-un čayan teüke』（略称『白い歴史』）と故宮鈔本、ウルガ本の記述を比較して、『白い歴史』が殿版系諸本の祖本に間違いないことを確認した。次いで『白い歴史』をはじめとする殿版系諸本にはチンギス・ハーン、アバダイ・サイン・ハーンについて他系統の諸本に見られない独特の記述が存在している点について検討し、そのうちのチンギス・ハーンの事績についての記述については、著者不明『アルタン・トプチ』から引用されたものであることを明らかにした。また『白い歴史』に記されていて、故宮鈔本、殿版には記述されていない文章が見られる点について、『白い歴史』と乾隆帝に献じられた『青吉斯汗世系記載檔案』との間に記述内容上どのような違いがあったかは分からないが、少なくとも故宮鈔本作成時に相当量の記述が削除された。さらに故宮鈔本から殿版を作成する際にも、清朝王家とチャハル王家の関係を記した部分が削除されている。これらの点から、最終的に出来上がった殿版『蒙古源流』は支配者の清朝を考慮して改編されたもので、政治的なフィルターを通して出来上がったものと見なければならぬと結論した。

第4章、「サガン・セチェンと『蒙古源流』の編纂について」はサガン・セチェンによる『蒙古源流』の編纂意図について、他のモンゴル年代記の記述と比較しつつ明らかにしたものである。サガン・セチェン自身はその著作の冒頭で、仏法がインド、チベット、モンゴルに広まったことと、これらの国がどのように盛大になったかを述べることを目的にしたと記している。実際『蒙古源流』にはそのような記述が多く見られる。この他に自身の所属するオルドス王家の事績を多く記していることから、それを後世に伝えることも一つの目的であったと見られる。しかしながら著者にはさらに以下に記す、別の目的があったと考えられる。すなわち『蒙古源流』には『アルタン・トプチ』などと似通った記述が見られるが、そこには他の年代記には記されていない、ボルジギン氏の「天命説」、「不可侵的存在」が強調して記されている。また清朝と対立したリグダン・ハーンは清朝側の史料ではその評価が低いが、『蒙古源流』ではかなり好意的に記されている。その他にもいくつか注目すべき記述がある。すなわち当時内モンゴルに対する清朝の支配が確立しつつあったが、サガン・セチェンは『蒙古源流』を編纂する中でチンギス・ハーンこそモンゴルの真の主権者であることを訴えようとした、と考えられるのである。

第5章、「『蒙古源流』と著者不明『アルタン・トプチ』との関係について」は、サガン・セチェンが『蒙古源流』を編纂した際に利用した史料について検討したものである。サガン・セチェンは『蒙古源流』を編纂した際に7種の史料を利用したとしてその名前を挙げているが、著者不明『アルタン・トプチ』の名は挙げていない。しかし著者不明『アルタン・トプチ』の成立年代は『蒙古源流』より古いとみられること、また両者には多くの類似する記述が見られることが注目される。本章では『蒙古源流』と著者不明『アルタン・トプチ』の類似した記述を比較し、明らかに前者が後者を利用したとみるべきであることを実証した。この他サガン・セチェンが7つの史料の中に『シラ・トゥージ』の名を挙げているため、従来多くの論者が、現在伝わっている同名のモンゴル年代記をそれに当てている点を批判し、現存の『シラ・トゥージ』は18世紀前半に編纂された新しいものであること、逆にこの『シラ・トゥージ』が『蒙古源流』を利用していることを明らかにした。

第2部「5種テキスト篇」は、第1部「研究篇」の第2章で系統分類した『蒙古源流』のテキストの代表的なもの、すなわちウルガ本(U本)、アラク・スルデ本(A本)、Erdeni-yin tobči-a(E本)、殿版系諸本のもとになったモンゴル国立中央図書館蔵の『白い歴史 Čayan teüke』(C本)と殿版の5種を選び、それらのテキストをローマ字転写し、それぞれの記述が対応するように並べて記したものである。1行80字をめどに入力し改行したが、それらの行には5種類のテキストをひとまとめにして前から順番に数字を付した。なお各テキストにはもとのテキストの葉数、表裏の数値を付した。テキスト中のxxxxxは当該テキストに他本で記される語彙、文章が無いことを意味している。これによって、各テキスト間の異同を容易に知ることが出来るとともに、未知の写本が出現した場合、その系統を容易に知ることが出来る。なお奥書2の部分

(第4317行以下)については Erdeni-yin tobči-a (E 本), 『白い歴史 Čayan teüke』(C 本)と殿版に記されていないため、内蒙古社会科学院蔵の Erdeni-altan tobči (AT 本)とジルガラントウ・スメ将来本(JS 本)に記されているものを参考のために示した。

第3部「訳注篇」は日本語訳、その訳注、参考文献、索引から構成されている。このうち日本語訳は基本的に「5種テキスト篇」に示したウルガ本を底本にして、他本の記述と比較し、ウルガ本の欠文、あるいは誤記を訂正しつつ訳出したものである。モンゴル語の原文には章、段落などは一切付けられていないが、日本語訳では意味的に文章が切れるところをめどに、節をたてている。その節の番号はその節の冒頭の文が5種テキスト本の第何行目にあたるかによって付したもので、節の番号が連続していないのはこのためである。モンゴル語原文は基本的に文語調で記されているが、訳文は口語を原則とした。訳注は原典の問題となる点、また説明すべき点、従来の研究に於いて問題となっている点などを中心に詳細に付した。

索引は原典に示された固有名詞(人名、地名・集団名など)をピックアップし、日本語訳でカタカナ表記された形をアイウエオ順に並べたものである。それぞれの語彙にはモンゴル語のローマ字転写したものを付している。

以上が主論文の要旨であるが、他に参考論文として「蒙古源流“Erdeni-yin tobči-a”の校訂」を付した。この参考論文は、いわゆるエルデニ・イン・トプチア系『蒙古源流』の3写本を対比して作成された校訂テキストである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、17世紀半ばのモンゴル人貴族サガン・セチェンがモンゴル語で著したモンゴル年代記『ハンらの根源に関わる宝石の(価値を持つ)概要 Qad-un ündüsün-ü Erdeni-yin tobči』、通称『蒙古源流』の文献学的、歴史学的研究である。『ハンらの根源に関わる宝石の(価値を持つ)概要』という書名は、モンゴルの君主(ハン)の王統が、インドを根源として、チベットの諸王を経て、モンゴルのチンギス・ハーン家に伝えられたとする『蒙古源流』の記述内容、サガン・セチェンの歴史認識を反映したものである。

『蒙古源流』は、モンゴル帝国崩壊後のモンゴル人の歴史、特に15~17世紀のモンゴル人の歴史を考察するためのきわめて重要な史料であり、また17世紀のモンゴル人の歴史認識を理解するための貴重な文献である。そのため、この史料については、海外においては19世紀前半のロシアのシュミット I. Ya. Schmidt 以来、また日本においても20世紀初頭の内藤湖南以来、多くの研究が積み重ねられてきた。しかし、『蒙古源流』の校訂本を作成するためのいくつかの試みがなされてはいるものの、なお信頼できる校訂本が存在しないという事実が端的に示すように、『蒙古源流』について残された研究課題もなお多い。本論文も、近年研究の進展の著しいモンゴルや中国における『蒙古源流』研究と競合しつつ、それらの課題の解決を目指したものである。

本論文は、主論文と参考論文「蒙古源流“Erdeni-yin tobči-a”の校訂」よりなる。3主論文は、第1部「研究篇」、第2部「5種テキスト篇」、第3部「訳注篇」の3部からなり、参考論文は、いわゆるエルデニ・イン・トプチア系『蒙古源流』の3写本を対比して作成された校訂テキストである。

主論文の第1部「研究篇」は、近年の論者による『蒙古源流』についての研究を統合したものである。

本「研究篇」の内容は、『蒙古源流』の著作年代、著作の意図、他のモンゴル語史料、例えば『アルタン・トプチ』や『シラ・トゥージ』との関係、など多岐にわたるが、最も注目すべきは、『蒙古源流』の諸写本に関する考察である。論者の努力によって、現在、『蒙古源流』の写本として、内モンゴルを含む中国に20数種類、モンゴルに4種類、ロシアに6種類、さらにかつて内モンゴルのオールドス地区で書写された3種類など、実に30種類を超える多数の写本の存在が確認されている。論者は、この多数の写本のほとんど全てをモンゴルや中国の所蔵機関に赴いて実地に調査し、それらの写本の特色を本論文の中で詳細に記述した。このこと自体、大きな成果といえるが、論者は写本の実地調査の過程で、写本に関わる以下に述べるような注目すべき成果をあげ、それらが本論文に詳述されている。

成果の第1は、従来の研究者による諸写本の安易な利用とそこから生じた誤りを正すことに成功している点である。例えば、内モンゴルのフフォンデルが出版した、エルデニ・イン・トプチア系のテキストを底本とする校訂本(1987年)については、論者はフフォンデルが使用した写本と校訂本を対比して、校訂本と原写本との間に杜撰な多くの異同があることを実例と共に指摘している(参考論文、154—180ページ)。また、モンゴルのナスバルジュルが、その校訂本(1961年、再版

1980年)において、他の諸写本に見えるある文章が、いわゆる『白い歴史』系(論者によれば故宮抄本と同系統、つまり殿版系)の『蒙古源流』の写本では脱落していると述べている箇所についても、原写本の調査によって、それが誤りであることを指摘している(「研究篇」, 86ページ)。これらは、原写本の注意深い調査無くしては到底不可能な指摘であり、論者が地道で誠実な信頼できる写本研究者であることを示すものである。

成果の第2は、いわゆる殿版『蒙古源流』の成立過程を、学界未知の4点の満州語檔案を用いて明瞭にした点である。檔案の記述から、殿版の作成にあたり、乾隆帝と写本の献上者チェンゲンジャブとの間で交わされたやりとりの詳細や、写本の所有者などが明らかにされ、殿版の成立過程がより明瞭となったのは大きな成果といえる。

成果の第3は、『蒙古源流』の諸写本が、大きく5つの系列に分類できることを明らかにした点である。論者によれば、諸写本は、1)ウルガ本系、2)アラク・スルデ本系、3)エルデニ・イン・トプチア系、4)殿版系、5)その他、に分類される(「研究篇」, 70ページ)。この分類は、写本間の、記述の一致・不一致、記述の共通する脱落・欠文などを対比するという、客観的な基準をもとになされており、きわめて説得力に富むものといえる。30種類をこえる多数の写本が、このように論者によって5つに分類された結果、今後もし新たに写本が発見されても、その写本の他の写本との関係を解明することはきわめて容易となった。また、この5分類の、各分類に属する代表的な写本を対校して、正確な信頼できる校訂本を作成する可能性も生まれたといえる。

次に、主論文の第2部「5種テキスト篇」は、写本の分類という上記の成果に基づいて、『蒙古源流』のモンゴル語全文を、5種の代表的なテキストのローマ字転写による並列という形で提示したものであり、これを見れば、テキスト間の異同は一目瞭然である。論者は、現段階ではなお校訂本の作成には至っていないが、今後は、この成果をさらに前進させて、信頼できる校訂本を出版することが期待される。ただし、校訂本では、モンゴル語原文を提示する場合に、韻文は韻文であることが一目で分かるように、例えば4行ごとに区分して提示するなど、より明瞭な形で提示することが望まれる。

主論文の第3部「訳注篇」は、第2部の5種テキストの対比によって知られるテキスト間の異同にも十分に注意を払いながら、最良のテキストであるウルガ本を中心に据えて、『蒙古源流』の全文を日本語に訳出し、詳細な注を付けたものである。全文は、本来原文にはない多数の段落(節)に分けて提示されているが、この論者による段落分けは妥当といえる。ただ、これらの段落に、論者によってその内容を示す小見出しが付けられていたならば、内容がより理解しやすく、またより読みやすかったであろう。

日本にも、従来、江実による『蒙古源流』の満州語訳からの邦訳(1940年)が存在し、研究者によって利用されてきた。しかし、モンゴル語からの訳出はこれが初めてである。その意味でも本論文の価値は高い。訳文は、原文のスタイルを反映して必ずしも流麗とはいえないが、文意を理解するには十分のものがある。今後、この訳文は、モンゴルの歴史や文化に関心を持つ多くの人々によって利用し続けられるであろう。

訳文に付けられた注は、写本間の字句の異同、佛教関係などの術語の説明、記述内容の他の文献との照合、固有名詞の説明など、きわめて詳細なものであり、本文を理解するために大いに有用である。特に、論者が、15~17世紀のモンゴルの歴史を専攻する歴史家であるため、当該時期の『蒙古源流』の記述については、注の中で多くのモンゴル語史料や漢文史料、チベット語史料との照合がなされ、論者の当該時代についての見解が明瞭に示されている。その意味でも、この部分は、特に15~17世紀のモンゴル史の研究者によって、今後、必ず参照されるべき大きな価値を持つといえる。

第3部「訳注篇」の末尾に付けられた参考文献(476~491ページ)も、『蒙古源流』研究に関わる文献を網羅して有用である。

このように本論文は、『蒙古源流』に関する論者の長年の研鑽を反映した着実な研究として高く評価できる。

ただ本論文にも、すでに触れた諸点の他になお望ましい点がないわけではない。日本語訳文の中には、モンゴル語原文が正確に訳出されていない場合も散見するし、韻文を韻文と気づかずに出している箇所も見られる。仏教関係の術語のサンسكريット語への還元点でも増補が望ましい。しかし、これらは本論文全体から見れば望蜀の言にすぎず、本論文の価値を決して損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。2001年9月28日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。